

# 末黒野

すぐるの

3月号 (通巻847号)



# 松飾る

小川 玉泉

(名譽主宰)

紅ほつぺの名前ふさはし冬苺  
オリオンを確かめ軋む雨戸鎖す  
くるみ割る手力足らず子に委ね  
日を浴びつ枯れ葉を散らす大櫟  
沖の船目指すはいづこ年詰まる  
調髪にゆかれず終ひ松飾る

調髪にゆかれず終ひ松飾る

年の暮れには必ずとい  
つてもいいほど調髪に行  
く。何十年も行つて来た  
年中行事のひとつであ  
る。原因の一つは左足の  
麻痺によるもので、我な  
がら出無精になったと思  
っている。しかし門の両  
脇に飾る若松は欠かせな  
いと、飾った。理髪店へ  
はご無礼のままである。  
年は取りたくないものよ  
と、改めて思った。

# 日向ぼこ

松本三千夫

全集の一巻欠けて漱石忌  
日向ぼこ羽あるものを羨しめる  
鴨発てり沼の明るさ引き連れて  
近道は寺の境内笹子鳴く

寒鴉農夫と同じ畑に下り  
日の当たる草へ集まり冬の蝶  
蚕の軒低く連ねて風冴ゆる  
燠のごと山間に入る冬日かな  
買ふ当てのなけれど浮かれ年の市  
レストラン運河へ零す師走の灯  
極月の流離ごころや港の灯  
七十周年昨日のごとし年忘

# 空つ風

池浚ふ舟の出てをり黄落期  
小春日の駅より駅へ小さき旅  
小さき寄付すませ枯野の道かへる  
単線の見下ろす溪の冬紅葉  
水仙の静けさに佇つ海風ぎて  
松に鳴り櫛に響けり空つ風  
一枚の空割りて朝日かな  
何もかもさらしてしまひ冬木立  
葱の泥しごく間に入る夕日かな  
ただ通るのみの祇園や片時雨  
篁の風となりたり冬の鳶  
北風吹けば白波碎け烏帽子岩

黒滝志麻子

(副主宰)

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 冬紅葉

森清堯

公園の小春を乗せて乳母車  
空つぽの空の句点や木守柿  
園小春いつしか集ふ乳母車  
深めたる山容の彫り冬はじめ  
胸汚しせせる白鳥田のにほひ  
松韻の岬の小道石路の花  
遠富士や浜を彩る水仙花  
岩すべる流れ幾筋冬紅葉  
地の人と話のはづみ花八手  
人過るたびにふはつと古曆

## 熊手壳

森清信子

潮の香のふくらむ河口鯨日和  
糲を焼く煙一筋会津富士  
幼児の涙の艶や初時雨  
ほめ上手笑はせ上手熊手壳  
糸を引くチーズのピザや小六月  
囿はるる湯の源泉や散紅葉  
白鳥を迎へし湖の碧さかな  
神域に響く木杵や帰り花  
冬鷗砂紋の透くる波平ら  
冬ざれや根上りの松磯馴松



## しぐれ雲

安齋久英

山並に生絹の雲や文化の日  
片山に日差し留めてしぐれけり  
畏みて神鈴振りぬ神迎へ  
小春風空のそれより深き藍  
燃えばなの檜火に退り切通し  
稜線の茜溶けゆき冬の朝  
陸封魚群るる小春の忘れ潮  
鳶滑空烏羽搏きしぐれけり  
声もなく水鳥岸を離れたり  
波よりも雲の真白や冬深み

## 朝の地震

石黒興平

日を受けて古書肆の軒の唐辛子  
毛筆の遺書と決めたり神の留守  
小雪やこころ波立つ朝の地震  
泉亭の揺るる水影浮寝鳥  
苔むせる羅漢の頭散紅葉  
湯気立てて暫し句ごころ湧くを待つ  
白鳥の水尾のかがやき沼動く  
日面となりて動きぬ鴨の陣  
堤ゆくジョギング鴨を発たせたり  
風止まぬ操車場跡冬芒

# 冬の吟行

田中臥石

一の滝二の滝巡る溪紅葉  
滑りさう溪谷沿ひの紅葉狩  
養老の溪の紅葉や滝の音  
鹿出づる上総の山の低きかな  
那須岳の雪やバス路の山毛櫨林  
黄落の山毛櫨の林や茶臼岳  
風花の鬼怒川溪谷道に舞ふ  
塩原の湯やしんしんと冬の霧  
柚子風呂やほのと匂へる妻の髪  
痛飲は通院となる年の暮



# 乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）



木の葉時雨

岡田史女

廃屋となりゆく生家雪ばんば  
トラツクに牛積まれゆく冬日かな  
吹きつゝのる夕べの風やきりたんぽ  
焼鳥屋男ら椅子とはみ出して  
風に声奪はれゐたり冬の賜  
何もせぬ一日の木の葉時雨かな  
一陽来復句座にしたしき声とこゑ

けもの道

岡野里子

散り急ぐ山茶花今し花盛り  
枝折戸ゆ雨の延べ段石路の花  
風に触れ枯草に触れけもの道  
碧落や冬のみぢの七重八重  
飛び石や落葉散り込む法の庭  
古祠へ苔のきざはし冬紅葉  
初雪やパンの香散らす販売車

散紅葉

加藤静江

濁流の激つ峡谷散紅葉  
紅葉かつ散る丹沢の女坂  
散紅葉一枚石の池の橋  
初雪や看とる術後の子は知命  
人声の絶えたる路地や雪催  
きりんめく湾のクレイン冬うらら  
大北風や海と競へる空の紺

冬 桜 菅野日出子

蒼天に白き点描冬桜  
吹きだまる落葉蹴りけり登校児  
一ト年を埋めると誓ひ買ふ日記  
夕風や落葉せかせる鳥の声  
餌をとらふ波すれすれの冬鷗  
お台場の夜のクルーズ聖夜の灯  
遠富士や雪輝やかす初御空

帰郷 齊藤マキ子

山灰降る田畑神の留守  
城山に沿ふ武家屋敷枇杷の花  
茶の花や多弁な姉とみて無口  
手焙りのある喫茶店遠汽笛  
出漁の汽笛短し冬の靄  
揚船に磯着の乾く小春かな  
石垣に石路咲く島の段畑

臘梅 堺昌子

臘梅のかをり届きぬ法の庭  
冬麗や木の間もれくる鳥の声  
初雪のぼたぼたとなる夜明けかな  
誰もをらぬ駅舎に乾され鮭二匹  
古民家や近所集ひて障子貼り  
霜柱ふむ音高き通学路  
冬桜のほつほつと別れ道

小春 吉田きみえ

夕映えの河原すれすれ冬ひばり  
紺碧の空や小春の鳶一羽  
紅の一葉句帳に冬紅葉  
枯れ蓮に風出て沼のさざれ波  
雲早き岬や冬の定まりぬ  
枯るるもの枯れ竹林の風の声  
山を背の寺彩りぬ冬桜

# 青炎集

## 松本三千夫選



横浜

塚越弥栄子

横浜

小沼糸み子

白糸の滝抱く山はげ紅葉  
並木路銀杏落葉の輝ける  
人影に灯る門灯冬ざるる

**枯るもの枯れて日向の石一つ**

粧ひを麓にまかせ山眠る  
焼芋を割れば黄色の極まりぬ

横浜

正谷民夫

アメリカ橋恵比寿にありぬ冬日和  
庭箒と熊手を買ひて木の葉道  
わが干支の色紙掛けたり年用意  
重たげの船笛響く雪の朝  
餅掲や盛り塩のする白の縁  
**大湯呑両手で包む飾売**

相模原

内田梢

野うさぎの耳ぴんと立て冬に入る

**踏む影のみな美しき冬日かな**

付け書院に円空写し十二月  
一舟となりて漣ゆく朴落葉

十二月の汽車道けふは向かひ風

大鏡の裏にまた部屋冬館

旅人となりて愛でるや冬桜  
**からつ風かかあ天下の一日欲し**

年暮るるスマホ繰る子等テスト終へ

新宿 稲垣佳子

散り積もる銀杏黄葉の無縁墓  
突く杖の影の長々冬桜

**山茶花のちりぬるをわか日の暮るる**

尼寺の庭の敷じやり冬椿

十二月大ぎ漬物樽一つ

テーブルを窓辺に移し十二月

横浜 原和三

**古都小春英語ガイドのポリスマン**

冬うらら園へいざなふささら川

冬黄葉朱の反り橋の称名寺

横笛庵部戸上げて冬紅葉

虚子立子の墓所を抱きて冬紅葉

里小春布ざうり置く無人店

横浜 占部美弥子

闊達なわが家の三毛や漱石忌

**漱石忌夫の赤シャツ干しにけり**

冬晴や伏し目の翳る露座仏

三門を入りて和めり石路の花

もう一度一葉館を一葉忌

夕富士を隠し切れざる冬木立

横浜 三橋玲子

背戸口の暗みに著し花八手  
畑仕事たのしと友は冬菜摘む

**乱帙のままの反故書や年の暮**

北国の訛も連れて塩の鮭

しきたりの甦り来る年の暮

冬ざくらその健気さをこころざす

横浜 北郷和顔

**キングの塔へ銀杏落葉や霧笛鳴る**

廃校の子等の魂とも木守柿

露天湯の湯気のかなたの冬銀河

硬き実の音踏みにけり落葉道

日本橋渡り納めて日記買ふ

畳替へて青き香りや刀掛

横浜 有賀鈴乃

柳散る間口二間の骨董屋

**うすら日にとけ入るばかり冬ざくら**

冬紅葉愛でつつランチ日溜りに

大銀杏色を尽くして散りしける

寄せなべや今夜は泊まる子と孫と

山頂は風や藪や頬打てり

# 耕 土 集

## 黒滝志麻子選

マチネーの鬘肩の役者菊日和

新潟 五味 紘子

木守柿孤高の色の枝の先

鈴なりの柿に迫るや夜の帳  
敗荷に己を見るや城の濠

小春日の漁の小舟や信濃川

りんごの香ただようてをり県境  
夜の帳白山茶花に迫りけり

LEDの煌めく櫛冬来たる  
讚美歌の聞こゆる町や慈善鍋

肩くらべするほど伸びて大根畑

玻璃越しに舞ふ初雪のいつ止まむ

横浜 田中 春江

青春のザラ紙黄ばむ漱石忌

悠悠と鳶舞ふ空や秋気澄む  
残菊や亡き母の名の届文

霜柱村に煮炊きの煙立つ

冬の日に会話賑はふカフエテラス

とげぬきさま我も牛歩の年あゆむ  
源流てふてのひらほどの冬泉

年の瀬の流るる雲の早さかな  
引越しの荷造り急ぐ年の暮

枯葉浴び眠ればセー又河畔かな

是松 三雄

同病を語る二人や温め酒

保育児の手にどんぐりや得意顔  
清流や底に紅葉を敷きつめて

満員のバスにほつこり冬西日

気に入らぬ妻の小言へ咳一つ  
冬木立駅からどつと人の波

けんちゃんやまるまる肥る庫裡の猫

猫の餌を日向へ移す漱石忌

落日へ消えゆく鳥や枯木立

久貝 芳次

横浜 高橋 正江

新潟 太田チエ子